〈本論第三回：アトム的コギトの〈方法〉と文明マシン〉

参考文献

※ルネ・デカルト『方法叙説（序説）』落合太郎訳、岩波文庫（原書初版は１６３７年）
※アドリアン・バイエ『デカルト伝』井沢義雄他訳、講談社（原書初版は１６９２年）

ルネサンス的定位は、アトム化のはじまりであり、そのアトムとしての個我から見た〈世界と人間〉の発見の開始でもあった。そしてまたアトムの対極としての国家組織も、人為的な〈芸術作品〉としての実験段階に入った。

この段階での機械情報革命はまだ準備期であり、資本は商業資本の全盛期、また生産は都市において、社会的分業を貫徹する、手工業的マニュファクチュアが始まったところだった。この段階から〈大航海時代〉が始まり、日本とヨーロッパの最初の遭遇も起こるわけだが、日本もまた下部構造、商業資本の充実、そして中世的手工業の再組織を中核とする萌芽的なマニュファクチュアもすでに開始していた。欠如していたのはルネサンス的個我が見た世界と人間の広がり、および草創期の近代国家だが、これもまた類推を広げれば、ある種の呼応関係は確認できる。つまり戦国末期に入ると、アニミズム的な基底部の昂進が見られ（俵屋宗達や琳派を代表とする）、また民衆における活発な異文化への好奇心は、やはりそれ自体、一つの〈新しい世界〉の発見であったと見ることができるからである。〈芸術作品としての国家〉の実験も欠如してはいなかった。それは封建末期の集権そのものをめぐる活発なイデオロギーと制度実験を産むことになる。信長の〈天下布武〉から、豊臣政権の萌芽的な絶対主義、また同じく萌芽的な重商主義がそれにあたるが、天下の帰趨が徳川氏に定まったことによって、その自然な社会進化は、幕藩体制として固定され、化石化することになる。したがって、近代的定位もまた、自然な発展を阻害され、琳派的花鳥の復興が、新しい人文性の流れとなって、そこから日本のデカルトを産むことはなかった。

デカルトにおいて、世界と人間は、はっきりとした近代的輪郭を備えることになる。それは一言で言って、個我の全面的な対自化であり、それはルネサンス的個我がまだ即自的であり、ある意味素朴でもあったのに対し、〈方法〉の自覚によって、世界全体と新たに向き合うことになる。この〈方法〉とはつまり、世界改変の方法であり、それは機械情報革命の前半部、機械革命における世界の機械システム化と精確に呼応していた。

ここまでをデカルト的合理主義の序論として、いよいよその定位内実を観察していくことにしよう。

ルネ・デカルト（１５９６～１６５０）の哲学的自伝であり、新しい哲学大系の開示でもある、『方法叙説』（**Discours de la methode**、１６３７初版）は、〈序説〉といまは訳されているが、昔は叙説とされていた時代もあったように記憶する。原語の表題は、〈方法についての講話〉というほどの意味で、したがって叙説が正しい。このことを最初にちょっと言っておくのは、それが〈序論〉という論文調ではなく、自由な講話、談話として設定されているからである。この文体についてはまたあとで述べるが、ともかく〈論文〉ではない。もっと距離の近い、〈仲間〉にむかっての座談のようなものだということにまず注意しておきたいのである。それはかすかな形でだが、あのルネサンス的な哲学的秘教の伝統とも呼応する（デカルトはその最後の形態の一つである、薔薇十字団に強い関心を示した）。

最初のデカルト伝の作者、アドリアン・バイエによると、この講話の元になったのは、刊行から十八年ほど前に見た夢だったらしい。１６１９年、二十三歳のデカルトは、志願して二度目の軍務についた（一度目はオランダ独立戦争）。旧教方のバイエルン公の軍隊に加わり、戦闘を行うことなく、そのまま南独バイエルンのノイブルクで冬期の駐屯に入った。間借りしたのは簡単な炉があるだけの農家だったらしい。１１月のある夜、彼は続けざまに三つの夢を見た。そこで解析幾何学の最初のアイデアを持っただけでなく、同様の数学的、幾何学的原理でいままでに存在したこともない、真の哲学大系を構築できるというヴィジョンに襲われた。

解析幾何は、現在の数理大系の基本中の基本で、わたしたちの世代はたしか中学くらいで習った。いわゆる座標を使う、関数表現を使う幾何学である。いまではもっと早くから教えているのかもしれない。コンピュータのグラフィックも、座標表示を行うことが通例だから、やはり早くから馴染んでおかないと、いまの世の中で苦労してしまう。したがって早めの習得が親心であり、常識だということだろう。その根本の着想は、始まったばかりの三十年戦争、熾烈な宗教戦争の凪ぎの時間、若い貴族下士官としての夢から始まった。このことに、わたしたちは、そろそろ〈歴史的感慨〉を抱いていいのかもしれない。

デカルト的方法とコギトのおさらいをする前に、解析幾何と座標系に少しだけ立ち止まっておこう。幾何学はデカルトの時代には、まだ〈ユークリッド幾何学〉が主流だった。紀元前三世紀頃、アレクサンドリアで活躍したエウクレイデスの『原論』は、定義、公理系、定理系の構築によって、古代の幾何学を集大成したもので、今日の幾何学の基礎をなしている。平面幾何学においては、デカルトの時代のみならず、十九世紀に平行線公準の妥当性をめぐって、非・平面の幾何学、リーマン幾何学が登場するまでは、ほぼそのままの形で学ばれていた。

古典古代において、代数はかなり初歩的であったのに、幾何学はこれだけ高い完成度をほこったのは、やはりバビロン、エジプト以来の天文観測や土地測量の蓄積があったからである。しかしまた、この高い学問的な完成度にもかかわらず、実用面では、バビロン、エジプトの水準が続いていたこともたしかである。ユークリッドの『原論』（ストイケイア）は一瞥すればわかるように（邦訳もすでに存在する）、〈純理〉として構築され、知的自己充足度が強いかわりに、実際への応用の影はほとんどさしていない（工学者として有名だったアルキメデスの方が、純理と実用の連結が強い。しかし彼は古代においては例外

的であった)。このことを言っておくのは、デカルトの〈解析〉が何をめざしたのか、なにを可能にしたのかを、いまいちどはっきりさせておきたいからである。つまりそれは、〈純理〉としての幾何学にはほとんどなにも貢献しなかった（一般の印象は逆かもしれないが)。そうであれば、非・ユークリッド幾何学の構築が必須となったはずだが、それは上述したように、デカルトとはまったく別の角度から幾何学を検討した、十九世紀のリーマンの出現をまたねばならなかったのである。

では、〈解析〉はなにをめざしたのか。座標は二次元空間を実数の対であらわす。三次元ならば三つの組となる。このあたりまえのことは、つまりは〈定量〉ということだった。そして〈定量〉は関数によって、〈操作〉可能となる。これから近代工学の莫大なメガ・マシンの世界、その邁進が始まる。橋をつくり、道路を通し、やがて鉄道、車、飛行機、ロケット……すべての〈図形〉が、この座標空間の〈定量化〉によって、操作可能となったこと、それがデカルト的解析学が実現したものだった。つまり、近代的文明の、その邁進する機会道具系の構築は、すべてこの１６１９年１１月の、無名の下士官が見た夢からはじまったということである。デカルトがこのすべての図形、すべての図形で包摂される〈延長物〉（レス・エクステンサ）の数理的操作を可能にしなければ、ワットもエジソンも存在しなかったかもしれない。つまり、デカルトは、〈純理〉ではなく、〈応用的操作〉によって、機械情報革命の原点を定めたのである、と総括できるだろう。文明道具系の、その座標系の決定と定量化を、である。

すべてはかれるものははかれ、記録せよ、と言ったのは、たしかガリレオだったと記憶する。ガリレオの天動説と惑星観察は、デカルトもよく知っていた。親友のメルセンヌがガリレオの心酔者だったからである。ガリレオの天体論を応用した『世界論』の出版直前に、ガリレオの異端審問が始まったために、デカルトは主著の出版をみあわせざるをえなかった。

この哲学史ではよく知られたガリレオとデカルトの影響関係は、いまから回顧すると、〈近代科学成立期〉の大きな流れの、その一場面であったことがわかる。ユークリッドやアルキメデスが達成した古代数理科学の水準は、それ自体としては完成されたもので、それを〈再発見〉したのは、ルネサンスの人文学者たちである。中世にも『原論』は知られていたが、好事家の修道士が時々読んでいたにすぎない。それを〈すばらしい古典古代の天才たち〉に対する熱狂が、時代現象にしていった。したがって、その応用もまた、たとえば橋や道路の計測に、中世石工の伝統にくわえ、幾何学的図形が用いられるようになる。アルベルティのようなルネサンス建築家のプランには、ユークリッドの影響が如実に認められる。しかし彼らの建築デッサンを見ればすぐにわかるのだが、そこに活用されているのは定規とコンパス、図形の組み合わせであって、数字の操作ではない。数字は、最後に、この柱、この建物の幅として記載されるだけである。したがってもちろん、強度や耐久度の計算はすべて経験にたよらざるをえなかった。建築途中に倒壊した建物も多い。

デカルトが可能にした、外的事物の幾何学的操作は、もう一度言うと、定量化とその定量を組み合わせる関数によってなされた。関数は、時軸の中性化、あるいは無力化に関係している。等号で結ばれるとは、時軸を逆転することを可能にするからである（これは現代物理を代表する等号方程式、$E=mc^2$にも妥当する)。この逆転によって、数理的な次元

でのシミュレーションが可能になる。実際に模型を造って、あるいは実物を造って、それが倒れるかちゃんと建っているかを調べる必要が、基本的にはなくなったのである。最初に造った橋や建物に耐久性があれば、同じ比例での新しい建築物にはあまり問題は生じない。この場合、関数の未知数に新しい数を入れるとは、つまり同じ規格の橋、道路を小さくしたり、大きくしたりして、どこにでも通せるということだった。そしてもう一つ、より根本的、哲学的な次元の、〈物〉の観念の一元的導入がある。それは定量の一元性に呼応するものだった。つまり〈物〉は、量的なマッスと外形のみを持つものとして定義されたのである。それは操作の〈資源〉だったと要約してもよい。ここから世界がすべて〈延長〉として措定されるという、一見して非常に奇妙なデカルトの世界論が展開されることになる。それは現実の世界よりは、むしろ設計図の背景としての世界の方になら、完全に妥当する「合理的」見方だった。

純理的な、純粋哲学的な革新者デカルトが、〈現実操作〉の天才的革新者だったというのは、これまでのデカルト観には、真っ向から衝突するかもしれない。そのことはわたし自身がよく知っている。わたしも、純粋な〈コギト〉の発見者としてのデカルトに心酔した、典型的な〈哲学青年〉の一人だったからである。しかしその青年の目からみて、大きな矛盾があった。それはデカルトの世界が、機械そのもの、化け物のようなメガ・マシンとして構想されていたことに気付いたあたりからだった。最初の違和感は、あの動物機械論あたりからだが、それが世界全体に延長されていることに、驚嘆し、ショックを受け、そして〈デカルトに対するデカルト的懐疑〉がはじまった。これがわたしのデカルト受容の流れだが、これもまた、例外というより、典型だったのかもしれない。ヨーロッパの近代哲学史そのもの、定位の思想史そのものが、デカルト的機械論に対する懐疑をへて、ロマン派の生気論的世界観へと逆転していくからである。

バイエの報告する１６１９年の夢は、はっきりとした記録が残されてはいないので、〈史実〉ではないとする哲学史家も多い。それはおそらく、この夢がデカルト哲学の原点であるならば、もっとも重要な転回、〈考えるわれ〉（レス・コギタンス）とその〈方法〉の夢、あるいはその萌芽なりとも登場するはずなのに、そうではなく、むしろデカルトの革新（哲学的革新）では、副次的と見られてきた解析幾何学が大きく前景に登場するからである。しかしバイエはデカルトと同時代人ではないにしても（１６４９～１７０６）、パリで長年要人の蔵書司書として働いており、デカルト崇拝が頂点に達していく、その〈英雄化〉の時期に生きた人である。したがってもし万一、バイエの夢の報告が創作であるとしても、それはこの崇拝の時期の核心を伝えていたかもしれないと思う。それはつまり、〈解析万能〉の時代を切り開いた天才への崇拝の念ではなかったのか。そしてもう一言言えば、それは哲学サークル、思想サークルとはちがって、たとえば工学や軍事での方面で著しかったのではないか。

もう一歩進めてみよう（想像のデカルト崇拝熱の観察）。

デカルトの時代、近代国家はすでに懐胎期から成立期へと向かっていた。たとえば、〈だれも隣人に干渉しないので、じつにものを考えるのに適している〉とデカルトが賞賛したオランダがそうである。イギリスはこれから清教徒革命という、大きな試練を経なければならなかったが、それでも国家の枠組みは、すでにエリザベス朝で整いはじめている。そ

してデカルトの故国、ブルボン朝のフランスはもっとも集権化、近代化の進んだ王国だった。こういう近代化の担い手は、ボトムアップの〈国民文化〉がはっきりと登場するまでは（つまり十九世紀のロマン派の登場までは)、先進的官僚、ブルジョワ（産業資本家へと転生しつつある)、そして軍人や広い意味での工学の実践者たちだった（彼らはすでに中世的職人ではない)。彼ら先進的近代人は、あらゆる場面で、〈合理的に〉、ものとひとを操作する、そういう本能的なデカルト主義者である。そしてそういう近代人は、〈合理を実践する人々〉として、すでに自己の裡に〈理性〉を確認した人たちだった。それは彼らの残したあらゆる表現、事績から透けて見える。どのような無名人でも、語るに足る〈事業〉をやった人物は、すべてこの新しい〈理性〉の光にてらされていた。そしてその〈理性〉は、なによりも、〈実践的、応用的理性〉だったのである。

さいごの一歩。

かれらにとって、〈コギト・エルゴ・スム〉は、すでに肉体化された、日常的定位の常識だったのではないか。自分はアトムのように孤立無援で、ただの一人で、計算と合理のみを方法手段にして、問題にたちむかっている。橋はいついつまで、道路はいついつまで。どのくらいの幅で、どのくらいの強度で、仕える予算はこれだけまで、すべて定量である。集められる職人は何人、労賃はいかほど……すべて見通しと合理と計算の世界である。足りなかったのは、なにか、その足りなかったなにかをデカルトがかれらに提供し、かれらのチャンピオンとなったとすれば……

足りなかったのは、システムだと思う。そのかなめは、肉体化したこの〈醒めたわれ〉と、外にあるごたごたした、未整理な、乱暴で無秩序な日常世界の結合だった。その世界を、〈座標〉によって単純化し、一元化し、そしてこの計算するわれと結合する。すべてが、可能となる。世界のすべては延長となる。われはそこにうまれる渦である。知性の渦。道具系の爆発と増殖。機械である動物、機械である他者、機械である世界と宇宙。このわれのみが、世界を超越した神の完全性、無謬性と直結される……

デカルトはやはり分水嶺であり、画期であると思う。近代的思惟のほとんどすべてが、彼の〈コギト〉の純粋性、明証性から出発している。ホッブズしかり、スピノザしかり、カントしかり。この流れは、フッサールから「現象学的存在論」、つまりハイデガーやサルトルにまで連続している。彼らがデカルトを批判し、修正し、あるいは逆転するとしても、すべてはやはり、「デカルト以降」として一つの流れなのである。

しかし哲学史におけるデカルト的明証性は、あまりに純粋であり、フッサール風に言うならば〈イデア的〉であり、そう、あまりに哲学的であったと思う。その画期が、あの一夜の夢の原点において、純理ではなく、むしろ応用であったということ、理性的常識のシステム化であったということ、そしてそこから近代文明の真の爆発が始まったということ、このことは神学化していくデカルト解釈のなかで、しばしば忘れられてきたようにおもう。だからこそ、この１６１９年の夢、たとえそれが神話であったとしても、その神話に典型的、決定的に記録された、〈文明の夢〉にもどってみたいのである。

ここまでをやや長めの前置きとして、〈方法〉をあらためて観察してみよう。『方法叙説』の核心部分である。〈方法〉の要諦は、四つの公準ににまとめられている。

1．主観的明証性：明証的に真であると認められるものの他は真ではない。明証性はわたしのこころにあらわれる（わたしの理性によって審判される）その明証性である。
2．分析：問題をできうるかぎり多くの、解決可能な小部分に分割すること。
3．操作手順：思考を単純なものから、複雑なものへと少しずつ前進させること。もしそうした手順に対応する順序が対象には存在しないとしても、わたしは順序を仮定しながら進む。
4．全体的検証：結論に達する前に、とりこぼしのないように、まず部分について枚挙の完全性を調べ、つぎに全体についても精査すること。

明証性は、理性によって審査される明証性であるから、このわたしのコギト以外の審判者は存在しない。これは、わたしたちにはすぐに首肯できる。宿題をやる小学生ですら、問題を解くときには、〈このぼくに見えるはっきりとした感じ〉に頼っている。これは反省してみるとすぐにわかる。そしてそこに史的反省を加えると……このわたしにおいて最終確認が行われる真偽というのは、まったく新しい、すくなくとも近代になってはじめて登場した検証法だということに気付き、あらためて驚かされるのである。しかしすぐに言っておかねばならないのは、その検証法は、デカルトによって始められたのではない。近代が始まるとき、それはヨーロッパでも、アジアでも、アジアの日本でも、まったくおなじ質の、〈主観的判定〉の是非が重要であるとされ、それが常態化し、常識化していくのである。そして〈われわれ〉は、この判定主体の均質な集団として現れ出る。

心学においても、儒学においても、国学においても、そして蘭学においても、想定される読者、講話の聴き手というものは、つねに「話が通じる」相手である。これは中世期までの語り手、書き手と受けての関係からは、はっきりと平準化、等質化が進んでいる。たとえば中世の法話は、近世においても口語の基本として受け継がれていったが、その基本は、「悟りを終えたわれ」と、「いまから悟るべきあなたがた」の対面対峙である。その高低ははっきりとしており、等質ではない。

この平準性は、近代的生産様式そのものと本質連関していることは直感できるだろう。つまり機械に貼り付いた個我のアトム性である。個我はその機械の全体を〈合理的システム〉として、〈方法〉の実現として反省し、対自化できる。つまりそれは〈近代的生産様式〉、つまり機械情報革命が可能にした、〈端末である均質なわれわれ〉の判断形式なのである。われわれはアトムであり、個我として理性をやどし、その理性が真偽をいま、ここのわれの眼前で判定する。その判定の是非、その責はわたし一人が追わねばならない。宿題の解答がまちがえれば、赤いバツがつく。それはもう子供でも知っている。そしてわれわれのすべては、かつてそういう子供だった。コギト・エルゴ・スム。判定し、そして生活している。

分析もわかりやすい。これもしかし、近代がはじまってようやく〈方法化〉したやりかただった。それまでは〈本能的に〉分析していたということかもしれない。たとえば分析が顕在化するのは、軍事においてだが、マラトンの戦いで、いっせいに進軍し、闘っていた重装歩兵たちは、アレクサンドロス大王の時代になると、長槍兵と騎兵の組み合わせに進化し、戦場の分析を斥候偵察という形であらかじめ行うことが習慣化していた。そして

大王の得意とした、〈退却をみせかけ、追跡する敵の戦列を長く伸ばし、反転して攻撃する〉というのは、ナポレオンが得意とした、〈騎兵による中央突破、孤立した各部隊の括弧撃破〉を彷彿とさせるものがある。彷彿とさせるが、大王はまだ直感で動き、ナポレオンは自己の裡なるマニュアルによって動くところが、古代と近代の違いである。ナポレオンは十分にカルテジアン（デカルト主義者）だったと言い換えることもできる。

軍事と、近代的分析の連関をもう少し敷衍しておこう。

デカルトが最初に軍務についたのは、これも志願してだが、オランダの独立戦争だった。八十年戦争とも言われる、その戦争の末期にオラニエ公マウリッツ（１５６７～１６２５年）の軍隊に参加している。このオラニエ公は名将として知られ、強固なスペイン軍と戦うために、ばらばらの傭兵にひとしかったオランダ軍を近代化していった。その近代化のかなめも、分析による規格化だったことが知られている。ばらばらの動作を小部分にわけて規格化し、それを教練によってたたきこむ、この方法は以降、現代にいたるまで、近代軍の基本中の基本となっている（付言すればこのオランダ式教練は、幕末の日本に移植され、最初の〈号令〉の体系を作った）。若きデカルトが、そこからなんらかのヒントを得たことはほぼ間違いないと思う。この近代化において、兵はたんなる〈単位〉として操作補填の対象となる。ここにもアトム化した〈コギト〉の合理性と規格性が透けて見える。

再び〈方法〉の公準の世界にもどろう。

明証性は、近代的日常、そこでの〈頭の使い方〉の基本だった。それを〈哲学的真理の明証性〉へと拡張してみせた時、〈近代哲学固有の〉絶滅死がおこった。明証性を持たない言表、ドグマ、大系は、すべて〈偽〉、あるいは〈低次の真偽不明の言表〉とされたのである。こうして、人文主義、その古典礼賛のほとんどすべてが切り捨てられることになった。特にその核心部にあった、自然神学、オカルティズム、魔術的科学（たとえば錬金術）が捨て去られた。まだそういうあやしげな魔術に手を染める者はあとをたたなかったが、しかしもう胸をはって、どうどうとやれる時代ではなくなった。ニュートンも錬金術に熱中したことが知られているが、それは職を失いかねない、それどころか異端の烙印を押されかねない危険をおかしてのものだった。錬金術師が王侯の顧問であることがごく普通であったのがルネサンス期であるから（エリザベス女王とジョン・ディーの関係など）、はっきりと時代の空気そのものが変わったのである。デカルトの友人のメルセンヌは、こうした魔術的世界観の核心に、ヘルメティズムがあるのを見抜き、彼らを天敵あつかいしている。ヘルメティストであることを誇りとした、フィチーノやピーコは、もちろん〈愚昧の徒〉として嫌悪の対象、唾棄の対象となった。

総じて、初期合理主義の陣営ではアニミズム的な要素は、すべて捨て去られた。幾何学は動物ではないと言うと、あらためてなにを言うのだとあきれられるかもしれない。逆に言ってみよう。動物は幾何学ではない。これはすぐにわかる。それほどあきれることではない。これがおそらく、ルネサンス人とわれわれをつなぐ、〈生き物の常識〉だろう。この常識が、まさにデカルト、メルセンヌの機械論的宇宙ではまったく通用しなくなるのである。

その理由は、公準の３と４にある。

これは通例のデカルト解釈にも、批判にも、それほど登場しないと思うので、すこし解説しておこう（判定は、あなたの〈わたし〉の理性にゆだねたい……あたりまえだが）。

３は〈操作手順〉とまとめてみたが、これは、普通は〈総合〉とまとめられている。４は〈検証〉だが、これにあらためて〈全体的〉と付け加えることはない。そしてこの二項こそ、〈応用〉のかなめなのである。特に３の後半のことわりは、デカルト解釈において、難問となってきた。〈総合〉の明証性が、その〈ないところにも順序を仮定しつつ〉という一文によって、大きくそこなわれると感じられたためである（わたしもかつてそう感じていた）。しかしこれは、カント的な明証性、〈先天的総合判断はいかに可能か〉（『プロレゴメナ』）にひきずられてのデカルト理解が原因ではないかと思う。つまり認識論的な純粋性をデカルトの方法の基調とすることによって、このバイアスが生じる。しかしデカルトのあとにカントがくるのであって、逆ではない。カントの意味での〈総合〉を、〈分析〉がその前にあるからといって、デカルトにあてはめるのは、哲学史的アナクロニズムである。

つまりここでは、分析―総合の対が呈示されているのではない。そうではなくて〈分析〉―〈手順〉である。その手順とは、思考の進展を操作する手順であって、それはつまりコギト・エルゴ・スムの〈応用〉であった。アトム化した個我の理性が、世界に対し、その世界を単一な、一元的な、等質な、〈もの〉として操作する、そのための〈手順〉なのである。したがって、〈順序〉が物自体に（後のカントの用語だが）内在しなくとも、いっさいかまわないのである。それはいま、ここの、わたしの、思考の操作手順であるから。ないのであれば、事後的に挿入すればいい、このおおざっぱで大胆ないいまわしの中に、このデカルトの〈方法〉の精髄がつまっていると思う。そしてそれは〈談話〉であり、〈講話〉である。デカルトが好んだのは、合理的な先進的な知性、たとえばオラニエ公のような人々、あるいはその下で橋をかけ、道路を通すような人々だった。その人々を前にして、〈きみ、ぼく〉の調子で談話する。〈ぼくが見つけた方法〉を披露する、それがこの大胆で、ざっくばらんな言い回しを生んだ。そうわたしは感じる。

もう少しデカルト的作業の現実に接近してみよう。つまり橋や道路、土木や、官僚制度の構築の現場である。するとこうなるのではないだろうか。〈分析〉とはつまり、もう使わなくなる橋や道路、旧弊な制度の〈解体〉である。この〈解体〉の過程において、既在の問題が個別化され、顕在化する。それが分かった時点で、新たな橋、道路、制度の〈組み立て〉に入る。その場合、問題を起こしていた箇所は除去されるだけでなく、橋は橋全体として、道路は道路全体として、制度は制度全体として完成されねばならない。したがって欠如しているモジュールは、その都度、完成されるべき全体のプランからして、外挿されていくのである。そうしなければ、永遠に建物も制度も完成しないであろうから。それが終わると、〈全体性の点検〉にはいる。これは試運転あるいは最初のメンテナンスとしてイメージできる。

これはあまりに応用本意の解釈だろうか。そうではない。デカルトにおいて、方法は本来応用と直結されていたからである。

『方法叙説』の原題は、とても長いもので、通用している表題はそれを縮めたものである。原題を訳すと、

〈かれの理性を正しく導き、もろもろの学問において、真理を求めるための方法の講話、ならびにこの方法の試みる屈折光学、気象学、および幾何学の成果を補説してある〉

という風になる。いかにも重いかつらをつけた（理性の外顔）バロック期の文人にふさわしい、装飾過多の表題だが、もともと、方法講話のすぐあとに、実際にこの諸学が論文として付加されていたのである。その後、講話部分だけで知られるようになったが、その講話の末尾にも、ウィリアム・ハーヴェイの解剖学を援用した循環器系の応用学が加えられている。これでわかるように、〈方法〉は即座に適用され、〈諸学〉において成果をあげたとデカルトは考えた。その実効性を報告するために、本書を構想し、執筆したのである。その場合、〈諸学〉は、〈方法〉の〈応用科学〉として位置づけられることになった。その〈応用〉のための要諦が、〈理性による操作〉であり、その操作は架空のものであってもかまわない、現実に存在しない要素を含んでいてもかまわない、そうこの一文は、ほとんど赤裸々に主張している。

この観点から改めて見るならば、４の〈検証〉において際だつのは、その徹底性、全体性である。それは〈応用〉のかなめでもあった。対象を〈物〉を、完璧に、全体として支配しなければならない。これは橋をぜんたいとして、建物をぜんたいとして把握することを必須とする建築家、大工、石工には常識中の常識であった。デカルトもそのことを言っているのだと思う。しかし莫大に拡張されたコンテクストにおいて、彼はまた同時に、世界と宇宙の全体を見ている。〈物〉を操作し、支配するということは、世界を、宇宙を〈方法〉が支配するということである。

こうして〈文明的理性〉の組み立てたロケットは、月に向かい、小惑星にもむかうことになった。座標系による、〈万物〉の支配である。あるいはそのヴィジョン。妄想。

原点に今一度戻るならば、〈解体〉と〈組み立て〉を最初に行ったのは、中世的工房を脱したマニュファクチュアにおいてだった。そこでは社会的分業が工場内での作業シンタクスとして貫徹されることになる。後にアダム・スミスがピンの単純な生産を例にとって分業の効率をモデル化した時（『国富論』）、そこでは定量という結果だけでなく、作業工程の純粋な分節化が必要不可欠な過程として呈示されている。この分節は、たとえばマニュファクチュア時代の最も範例的な産品、時計の場合には非常に長い工程を前提とするようになる。しかし原理は同一であり、それは解体と組み立て、それに尽きる。それは日本の江戸期を通じて見られた、精巧化の過程でもあった。この過程がある識閾を超えた時、そこに〈資本〉が参加してきて、全体の過程を加速度化することになる。マルクスの『資本論第一巻』で模範的に記述された過程がこうして進行し、機械と機械を動かす動力への需要が急速に生まれ、こうして産業革命が用意されていくことになる。これもおそらく幕末までに日本で自生しつつあった生産過程、下部構造の自己組織化だった。

したがってその原点における先導者は、機械ではなく、社会組織である。資本ではない。やはり人間の組織である（マルクスの主張には反するかもしれないが）。その場合、どうして機械情報革命の土壌となる社会的分業の組織化がこの時期に飛躍的に進み、そしてつ

いにはその合理的組み立ての〈イデオローグ〉としてのデカルトを生んだのかという問題は、近代というマクロの時代の懐胎、進展の内奥の問題なのだろう。

一つのヒントは、やはり中世的紐帯の自壊、解体からまず個我が、つまりあのルネサンス的個我が生まれる必然性にあるのではないかと思える。デカルトの先駆者の一面があるあのレオナルドの機械研究を一瞥すれば、それはまさにマニュファクチュアを前提とした試行であることは一目瞭然となる。いわば特大の時計を次々とプラニングしていくようなものである。するとやはりここでも個我における、その観念世界における想像力の飛翔、それが機械情報革命の先駆形態だったのではないかという直感を得ることができると思う。

ここにでは江戸的近世はどういうかかわりを持っているのか。

わたしは、それは、〈からくり〉の限界として概念化可能ではないかと感じている。江戸期は特に精巧な手工業が発展し、それはその精巧さを〈からくり〉として誇示するという文化を生んだ。それはマニュファクチュアを前提としており、やはり〈解体〉と〈組み立て〉の往復運動と関係している。これも直感的に把握できる事実である。では〈からくり〉はレオナルド＝デカルトの意味での合理性を兼ね備えた、近代的機械の先駆型だったのか。それは…どうもちがう。これもわたしたちは直感的に感じる。ではこの差異の本当の根拠は何なのか。

わたしはそれこそが、〈方法〉の有無ではないかと思う。レオナルド＝デカルトの基軸上は、はっきりと〈解体〉は〈方法〉によって〈組み立て〉と結合されていた。つまりそれは、定量化と関数操作の方向へと向かっていた。レオナルドにおいては、まだ図形魔術的要素が混入するものの、しかし基調はすでに十分に合理的、操作的、方法的である。この方法の合理性が江戸的〈からくり〉にはほぼ完全に欠如している。したがってそれは単品としての精巧物であり、同じようなものを設計図、そこでの関数操作によって拡張していくことができない。

さらにこの根本の原因、彼我における〈方法〉の有無の真の原因は何だろうか。

わたしは一応仮説的にだが、それは〈個我〉のアトム化の深度、普遍性、そして再組織化の全体性に関係していたように感じる。つまりルネサンスがあって、それが宗教改革で一度全面的に否定され、そしてデカルトたちの時代になるという、この順序において深化したものこそ、アトム化の徹底性、そして再組織化の全体的要求であったと思う。それが江戸初期の個我には欠けていた。強制的に身分制度という擬似社会組織に組み込まれることによって、彼らのアトム化はいわば中途で止まってしまったのではないかと思う。そのことが方法化に不可欠な、徹底性と明証性の定位時空を阻害することになった。したがって江戸期には、〈からくり〉は無数に生まれたが、日本のレオナルド、日本のデカルトを生むことはなかったのである。それを一応の仮説として提出しておこう。

デカルトの場合、この再組織の全体性は、〈理性〉の全体性として顕在化した。彼はこの全体性によって、マニュファクチュアから始まる機械情報革命に、文字通り〈理性〉をあたえたのである。そしてその〈理性〉は、合理的機械の総体として、自分の世界をとらえた。なぜなら、たんなる延長である〈物〉に秩序をあたえるのは理性であるから。そしてその理性は、白紙委任状を持っている。神が世界を理性に委託したのである。

神が世界を委託したのは、アダムとエヴァに対してだった。そして当時の楽園はもう失われている。では、理性が世界を自由に資源化する、その究極の根拠はなになのか。

それは、神の完全性と無限性である。

こうデカルトの神学を要約しても、現代人であるわれわれにはほとんど了解不可能である。哲学史のアパラートを使えば（わたしがかつて使ったように）了解は可能になるが、そこには〈わたし〉はもはや住みえないことも即座にわかる。莫大な距離感があるからである。

しかしデカルトには神学が必要だった。彼の友メルセンヌにも、当時の先進的合理主義者には、なんらかの神学が必要だった。かれらの近代は、中世と直結されていたからだ、そう後知恵の総括を行うことができる。そしてそれは、案外、いまも邁進しつづける、ギガ・マシンとしての〈文明道具系〉に内在する逆説なのかもしれない。

この内在的矛盾を最後に検討しておこう。

近代的方法、最先端の方法を呈示したデカルトは、すぐなにかが足りないと気がつく。神がたりないのである。そこで神の存在を証明する必要が生じる。存在を証明しなければならない万能者とは、はたしてなにものか、という素朴な疑問はおいておくとして、ここでもまた、究極の根拠となるのは、〈幾何学的明証性〉だった。こういう順序である。

神は存在するならば、完全な存在者であるはずだ。

神はわたしではない。

そのわたしは、明証的に、幾何学的な真理を省察することができる。

三角形の内角の和が二直角に等しいことは、そうした真理の一つである。

その真理は、わたしの観念に内在している。

わたしが神は完全であると観念するとき、その観念のなかに存在の観念も内在している。

したがって、完全なる神は、幾何学的真理と同じ明証性をもって、真理である。

あともう一つ註釈がある。

観念の明証性は完全であり、わたしのような不完全なものにはふさわしくない。

したがってそれは、神の完全性が、わたしの裡に宿らせたものにちがいない。

これだけである。実にスコラ的で、難解で、そしてなにかやかやのトリックに満ちている感じがするが、その論理はたしかに〈明証的〉であるので、すぐには反駁できない。

ここで欠落しているもの、それはすぐに抽出できる。

神とわたしをつなぐもの、その媒介が欠如している。カトリックの教義では、神の子イエス・キリストだった。精神、あるいは理性は、〈精霊〉の影を宿してはいるものの、そこには媒介はない。〈信仰〉ではなく、〈明証性〉があくまで問題だからである。明証的なのは、このわたしのコギトの運動態であって、外部からふっとやってくる〈精霊〉ではない。

ふっとやってくる。

ふっとそこにいく。

この言葉で、わたしはふたたびフィチーノやピーコを連想する。つまりかれらの〈脱自〉を連想する。それがかれらを世界と、古代と、そして信仰と媒介したのだった。あやうい媒介にはちがいない。真正面から衝突する原理、異教の此岸と、神の彼岸がつねに息しさ

れていたからである。したがって、〈対立物の調和〉（ディスコルディア・コンコルス）が希求されることになる。

デカルトやメルセンヌは、この調和の必要がなかった。ルネサンス的均衡を否定し、嘲笑し、切り捨てていたからである。あれは魔術だ、トリックだ、インチキだ、香具師だ、と。

世は、狂乱の反宗教改革が、中世期末以来、数世紀にわたる人文主義とその最大の成果である、〈古典古代の再生〉を全否定し、切り捨てていく、そういう時代だった。人文主義は〈悪魔の手先〉と見なされる、そういう時代である。その時代に、メルセンヌやデカルトは、イエズス会のエリート校で教育を受けた。その教育の〈王冠〉は、スコラ哲学と神学である。

近代哲学史は、デカルトの理性主義を、スコラ哲学へのアンチテーゼだと一義的にとらえることが多かった、あまりに多かった。そして〈方法〉の呈示の直後に、〈神の存在証明〉を行う、そのデカルトのせっぱ詰まった心性の基底をとらえそこなった。単純化して言えば、彼らは、デカルトの（そしてメルセンヌたちの）心の基底にいまだに脈付いていた〈中世〉を見逃したのではないかと思う。そしてその〈中世〉は、もはやルネサンス的人文主義という対重を失った、そういう中世である。異端審問が荒れ狂い、やがて新教国では魔女狩りの悪夢が猖獗を極めることになる。いずれも、媒介を失った、むきだしの中世的狂信の〈再生〉だった。

そういう中世の圧迫を感じつつ、理性を原理とすることから、近代は、近代的定位は出発した。まさにそのデカルトのコギトにおいて、媒介を失った、〈物〉となった世界が露呈する。それは中世的ではない。中世的悪夢は、まだしも〈色〉の世界だった。では理性はどうふるまえばいいのか。〈物〉を理性化していくしかないではないか。機械が世界をおおいつくす、それでいいではないか。

しかしもしそれが、幻影であり、夢であり、悪夢であるとしたら。

ここに、独特の悪夢、近代固有の悪夢が生じることになる。

もし〈神〉が、〈欺く神〉ならば。この世界が、〈悪霊〉の見せる幻影ならば……

これが〈デカルト的懐疑〉のいたりつく極北なのだが、その内部構造はかなり複雑である。

１．まず感覚世界の真理性が〈不確かなもの、一度は疑ってみるにあたいするもの〉として否定される。

２．次に感覚世界とかかわる諸学、天文学、医学、自然学の真理性は、不完全であるとされる。感覚世界を超越している幾何学にだけ、十全なる真理性が認められる。

３．これは２＋３＝５という真理を、わたしが醒めていても夢の中でも確認できるということでも傍証される。

４．しかし神は万能、最善のお方としてわたしたちを創造されたと言われているのに、わたしは時として、しばしば誤謬を犯す。このことは神の万能性に対する反駁とはならないのだろうか。

５．感覚世界の事物も神が創造された。ではそれが偽なるものではなく、真なるものとして創造されたのかもしれない。懐疑をしているこのわたしは、そのことを否定することができない（懐疑に対する懐疑）。

６．そこでわたしは、極端な場合を想定して、思考実験を行う。こうしたすべての懐疑に最終的にかたをつけるために。

７．欺く神、悪霊がわたしに事物を見せる。それが事物だといって見せるが、天も空気も大地も色も形も、音も、魔神がわたしの感覚をたぶらかしているのである。わたしはどうするか、徹底的な懐疑の裡にとじこもる。それらの真理性をすべて否定しながら。

８．しかしそこにおいてこそ、わたしは、わたしの不完全性、有限性を知ることができる。懐疑の裡にとじこもり、真偽判断ができないか、誤りをしばしば犯す自分を知る。

９．この自分の有限性を知るのは、無限性、完全性がわたしの裡に先在するからである。

１０．この究極の無限性、完全性こそ、実体としての神に他ならない。

１１．この無限は真の観念だが、有限なるものを否定することによって知覚するのではない（否定の神学の否定）。

１２．そうではなく、無限の観念によってこそ、わたしはわたしの有限性、不完全性と、世界の事物の有限性、不完全性を知る。そのことを明瞭に、明証的に理解するのである。

１３．したがって神は無限の完全なる実体として、つねに存在する（『省察』の〈神の存在証明〉の要約）。

神の存在証明として、無限や完全性を援用することは、古くから行われていた定番中の定番だった。エリート神学校ではおそらく初歩の初歩に属する常識だっただろう。その常識をデカルトがここで持ち出したのは、〈悪夢〉のなまなましさのせいだと思う。ほとんど、それだけのためである。つまり、感覚世界の虚偽性のなまなましさ。これもしかし、中世的常套で、悪魔は被造物の被造物性を悪用して、〈すばらしい夢を見せ、最後には地獄に落とす〉ということである。この枠からたとえばファウスト伝説も生まれることになる。デカルトの独自性は、この〈感覚世界の虚偽性〉が、〈万能〉、〈無限〉と連結されたことだった。実体として、連結されたのである。欺く者は、堕天使、神への反抗者のはずだった。しかしそれがもし神ならば……

ここには隠された項がある。つまり神が〈神の国〉に被造物である人間を救済しようとして、感覚世界の真理性、虚偽性を〈最終的に〉剔抉しようとしたら、という項目である。つまりこの悪夢を、懐疑の悪夢をデカルトに見せているのが、〈真の神〉であるとしたら……その欺く行為は、神の完全性に矛盾するのではないか。

この奇妙な堂々巡りの世界まで来ると、ほとんどスタヴローギンや、イヴァン・カラマーゾフの自己撞着につぐ自己撞着の世界である。そしてたしかにここには、近代の本当の悪夢が隠されている。無媒介に中世と連結された近代の。

デカルトの解決は、〈無限〉の転回だった。無限を有限の否定ではなく、実体だと断言し、しかもその実体を自分は明証的に理解できるとしたのである。

アナクシマンドロス以来、〈無限〉は有限の否定だった。それは不完全な認識しかもちろん生まない。しかしそれは知性の有限性の限界であって、〈無限〉はやはり完全なので

ある。少なくともアナクシマンドロスはそう理解して、実体的な世界原理だとした。外在する世界の、である。それをキリスト教的な神学は、神の超越性の説明に活用した。クザーヌスたちの〈否定の神学〉がこうして誕生する。その場合も、人間の知性、認識はつねに不完全であり、それでいいのだとされた。〈信仰〉がもちろん残されているからである。

デカルトは、ここではじめて、神学の文脈で、それもキリスト教の超越神学の文脈で、神を実体的に観念と結合した。それによって、理性を持つわれわれも、神を実体として認識できるようになった。間接証明であり、われわれの不完全性、誤謬性を媒介としてだが、それでも明証的に、内観において（省察において）了解可能だと断言したのである。

これによって、神は消えた、と判断すれば、デカルトは無神論者で、唯物論者だったということになる。そう理解したデカルト学者も多数いた。

これによって、神は理性と融合した、と判断した人たちもいた。その見方からは、デカルトは〈理性宗教〉の先駆者だということになる。

わたしは、両方ではないかと思う。

その理由の一つは、デカルトの理性と神の〈実体的〉融合は、エックハルトの〈ウニオ〉（神と魂の合一）とシンタクス構造が非常に似ているからである。しかし似ているのはそのウニオの部分だけである。エックハルトにはもちろん徹底した〈方法的懐疑〉は欠如しているし、感覚的事物は、〈比喩〉の基体として積極的に活用されている。全否定はされていないのである。したがって、神はやはりいないような、いるような形で近代的コギトの視界の前をただよっている、というのがありのままの姿ではないかと思う。デカルトの極端な思考実験に即して、そう見えるということである。

そして最後に、神はもちろん思考実験の対象ではなかった。存在証明を必要とすることもなかった。

いや、そうではない。宗教改革と反宗教改革とは、つまりは〈わたしたちの神〉の存在証明をめぐっていたともいえる。

そのちみどろの戦いがはじまろうとする１６１９年に、デカルトは幾何学の定量化、関数化の夢を見た。その夢からわたしたちの〈近代文明〉と、メガ・マシンの驀進ははじまった。そしていまその機械は、自分の理性を、自分のコギトを持とうとしている（持つかもしれないところまで、自己進化してきている）。

この総過程を見て、その文明病理の全体を〈省察〉するならば、やはりどこかにデカルトの〈欺く神〉は隠れ、そして働いていたようにも感じるのである。実体として。〈順序がないところにも、順序を想定しつつ〉はたらく、あるものとして。

もう悪夢はデカルトではなく、われわれに引き継がれている。はるかに巨大な、現実の悪夢として。その解決を模索するために、その出発点、世界が機械へと化け変わりはじめた、その宗教戦争の時代の〈方法〉の現場を、少し思い起こしてみたかったのである。

デカルト的合理主義は、近代的組織論へと応用された場合、よく機能する官僚制、軍制を産む。これがフロンドの乱を制圧して絶対主義を確立したルイ十四世の〈方法〉でもあった。しかしまたそれは中世的な、あるいは宗教戦争的な修羅、地獄とつねに隣接している。このことはどこかで、〈錦旗〉の中世性、あるいは古代性が産んだ廃仏毀釈の大混乱と、その修羅を通過して鍛えられた大久保たちの官僚主義、その合理精神の二律背反を思

わせるものがある。やはりここでも、源泉としての近代的シンタクス、そしてわれわれの淵源としての近代国家の草創は、どこかで重なり合い、そして偏差しているようだということが確認できると思う。

ともあれしかし、デカルトを産まなかったわれわれにも、合理精神は産まれた。それはマニュファクチュアと不完全ながら進行した都市部における個我のアトム化を土壌とし、そこに移植された蘭学が咲かせた固有の定位の華である。したがって日本固有のその合理精神の検証は、江戸期の定位型として扱うことにしたい（第二章第四節）。

（本論第三回テクスト終わり）